

ペテロの否認告知と Nachfolge モチーフ

——マルコ14章26－31節の解釈——

中山 貴 子

Die Ansage der Verleugnung des Petrus und das Nachfolge-Motiv

—— zur Erklärung von Mk 14: 26–31 ——

Takako NAKAYAMA

序

I マルコ福音書14章26－31節の分析

(1) ペテロ否認物語との関係

(2) 14：26－31の分析

II ルカ福音書22章31－34節との関係

III ヨハネ福音書13章31－38節との関係

IV マルコ福音書14章26－31節の釈義的・神学的考察

(1) オリブ山途上のモチーフ

(2) 弟子たちの Nachfolge とガリラヤモチーフ

結

序

マルコ受難物語の頂点である十字架報知においてイエスの十字架の死は、神に捨てられることそのものである（15：34bc）¹⁾。神に捨てられることに極まるイエスの十字架の死は、弟子たちにとって理解不可能な受容しがたい出来事であったことを、マルコによる弟子たちの無理解モチーフは明らかにしている。このことはイエスに対する Nachfolge の問題でもある。弟子たちはガリラヤにおける神の国運動に対しては Nachfolge することはできても、イエスの十

1) 拙稿「イエスの十字架の死についての一考察 マルコ福音書15章33－39節の釈義を中心として」広島女学院大学論集23集1973参照。青野太潮「『十字架の神学』の成立」ヨルダン社1989。244－278頁。

十字架の死（逮捕、裁判、十字架刑死、埋葬）に対しては Nachfolge することができなかった。

他方、マルコが対照的に描いているのが女たちの Nachfolge モチーフである。ガリラヤにおけるイエスの活動のはじめから、イエスの十字架の死、埋葬、復活、教会の福音宣教に至るまで一貫して保持している²⁾。

弟子たちのイエスの十字架の死に対する無理解と Nachfolge の挫折は、受難物語のペテロの否認告知（14：26-31）と否認物語（14：66-72）に最も明白に述べられている。このことはマルコ福音書全体における弟子たちの Nachfolge の問題とどのように関係しているのだろうか。マルコの弟子理解の視点から考察してみよう。

I マルコ福音書14章26-31節の分析

(1) ペテロ否認物語との関係

受難物語のすぐれた研究者である Linnemann は、14：26-31否認告知と14：66-72否認物語との文献学的関係の問題について従来多くの注解者がほとんど研究してこなかったと述べ、その例外として Bultmann の解釈をあげている³⁾。そこでまずこの問題についての Bultmann の解釈の検討から始めよう。Bultmann の受難物語の再構成のプロセスにおいて両者はどのように位置づけられているのだろうか。彼は、逮捕、最高法院とピラトによる死刑判決、十字架刑への連行、十字架刑死について簡潔にまとめた一つの古い報告を受難物語の基礎資料と考えている。それに対してペテロ否認物語は、元来は独立の個別伝承であって二次的に逮捕の伝承と結合され、両者の共通の導入部としてマルコ14：27-31が形成されたとみている。さらに26節によってイエスの最後の食事14：22-25と結合したのである。このように Bultmann はペテロ否認物語をペテロ否認告知よりもより古い伝承とみなしている⁴⁾。

しかし両者の成立の順序の問題について最も詳細に論述している Linnemann の解釈を取り上げてみよう。彼女はペテロ否認告知もまた元来は独立の個別伝承であることを、14：17-21裏切りの預言（独立個別伝承）とに共通の Schema を論証することで証明しようとする。イエスの告知 [A] 弟子たちの反応 [B] 再度のイエスの宣言 [C] 聖書証明 [D] とすると 14：17

2) 拙稿「イエスの十字架の死と塗油物語 マルコ福音書14章3-9節の解釈」広島女学院大学論集36集1986参照。

3) Linnemann: Studien zur Passionsgeschichte, S. 82.

4) Bultmann: Geschichte, S. 299-301. 14：24-31にペテロの否認予告と弟子たちの逃亡予告が含まれているため。ただし14：28は文脈の切断、否認物語を越えたさらに大きな文脈を示唆していること、frag. fraijum に欠如していることなどから二次的とみる。マルコ本文への後の付加なのか、マルコ自身が元来の福音書の結尾の準備のために挿入したのかかわからないという。

—21は $A \rightarrow B \rightarrow C \rightarrow D$, 14:27—31は $A \rightarrow D \rightarrow B \rightarrow C$ となる⁵⁾。さらに14:27—31と14:43—52とに文献学的関連は存在しない。14:27—31は14:43—52の導入として形成されたのではない。ペテロ否認告知と否認物語との関係は、14:72と14:30の厳密な一致が認められ、14:72は14:30のイエスの言葉を前提としていることから否認物語が否認告知に依存している⁶⁾。従って Bultmann の言うように、14:27—31は14:66—72の成立後、それを受難物語伝承に二次的に結合するための *Einleitung* として編集上形成されたものではない。否認物語は、否認告知が知られるようになった後で、小説的・教訓的な関心から形成されたものである。

(2) 14:26—31の分析

① 26節

26節は、*ὁμνήσατες* が過越の食事の最後に歌われる Hallel の術語であることから⁷⁾、14:17—25の最後の食事と14:27—31ペテロ否認告知との結合句である⁸⁾。これをマルコの編集句とみるのは①イエスの最後の食事を過越の食事と同一視するのはマルコのモティーフ (Bultmann) ② *ἐξηλθόν* がマルコの編集句に多用されていること (1:21, 22, 32, 45, 2:2, 5:1) ③オリブ山モティーフ (Dormeyer) はマルコの編集上のモティーフであることによる。エルサレム入城後も、イエスはエルサレム→バタニヤ (Dormeyer の言う *Wochen schema*) を崩していない。たしかに過越の夜についてはエルサレム滞在の規定があるが、当時オリブ山は広義のエルサレム市街区に属していたため律法違反にはならなかった。(Ex 12:22, Billerbeck, I 992)⁹⁾。マルコにとってオリブ山はエルサレム神殿に対峙する特別に象徴的な意味を持っていた。神殿は“強盗の巢”として拒否されるのに対して (13:2, 14), オリブ山はイエスの教えの場である (13:3)。Schenke によれば¹⁰⁾、マルコにとってオリブ山は神殿とエルサレムに対する審判の場でもある。26節は後述するように単なる場所の移動ではない。

② 27節

27a の *σκανδαλίζω* はマルコ福音書伝承部分に多くみられる (4:17, 6:3, 9:42, 43, 45, 47)。27b はゼカリヤ書13章7節の引用であるが、MT, LXX の命令法ではなくて預言的未来形

5) 14:28は後の挿入のため除外。14:31の弟子たちの再度の反応は Schema の様式を逸脱、後の挿入のため除く。Linnemann: Studien, S. 89.

6) Linnemann: Studien, S. 85. Dibelius の解釈にも言及、否認物語は小説的な技巧をこらした構造を持つ。Formgeschichte, S. 216.

7) Str.—Bill IV S. 72 f. 75f. 詩編115—118. Linnemannは過越祭の食事ではなく、主の晩餐伝承と関連させ I Kor 14:26, Kol 13:16, Eph 5:19からも詩編が用いられたという。同様に Schweizer: Markus, S. 167. しかし Resig R. 2 (5 a) の Hallel を *ὕμνος* の術語とする例がある。

8) 元来結合していたと考えるのは Pesch: Markusevangelium, S. 377. ほとんどの注解者は二次的結合句と考えている。

9) Jeremias: Abendmahlsworte, S. 49 f. それに対してバタニヤは市街区域外。

10) Schenke: Studien, S. 351 f. Dormeyer: Passion, S. 110.

をとっている¹¹⁾。イエスの受難を神の意志に求める聖書証明モチーフの伝承であるが¹²⁾、27a と27b を二次的に結合したのはマルコの編集段階であろう。27a は直接29のペテロの言葉と結合するからである。マルコが27b の聖書証明モチーフを採用したのは、マルコ受難物語を貫いている「時の知らせ」モチーフ (15:1, 25, 33, 34, 42)、3回にわたる受難預言の“δεῖ”と同様、イエスの十字架の死の必然性、主体性の表明のためである。27a は27b と結合することで14:50の弟子の逃亡と対応する。

③ 28節

27節が直接29節と結合していること、内容的にもペテロ否認告知・否認物語をこえたモチーフを持っているため、28節はマルコの編集上の創作による二次的挿入であることは明白である¹³⁾。14:28と対応する復活物語の16:7もマルコの形成である¹⁴⁾。

④ 29-31節

27節の *σκανδαλισθήσεσθε* と29節の *σκανδαλισθήσονται* とが対応して27節に直接結合している。基本的に29-31節は言語上からみても伝承に由来する。ただ30節の *ταύτη τῇ νυκτὶ* はマルコの好む「時の知らせ」の二重定式 (1:35, 4:35, 10:30) を示しているため、31d は14:50と対応しているためマルコの編集上の挿入と考えてもよい。従って前マルコ伝承層は26, 27a, 29-31c, マルコの編集形成は27b, 28, 31d となる¹⁵⁾。

II ルカ福音書22章31-34節との関係

ルカはマルコ14:26-31をその神学的意図に従って細部にわたって改訂している。そこで対照表を作成の上、検討してみよう。

① 31-32節

元来はルカ独自の受難物語伝承に属するロギオンであることは、ヨブ記1:6-12, 2:1-6の神の承認によるサタンの試みのモチーフ、“シモン、シモン”の二重の呼びかけ¹⁶⁾、*διδύμασαι* の新約聖書における Hapaxlegomena 用法などからも指摘できる。31-32は、33-34と

11) Klostermann: Markus, S. 149.

12) ただマルコはイエスと弟子たちとの関係を羊飼とその群れのイメージによって表現することはない。群衆については6:34。σκορπίζωによる Joh 16:32との関連については Lohmeyer: Markus, S. 311 f.

13) マルコの編集上の形成と見るもの Mohr, Hirsch, Bultmann, Schweizer, Haenchen, Gnllka, Marxen, Dormeyer, Schenk など。

14) μετὰ τὸ ἐγεθῆναι という時の知らせ, πρόαξω ὁμᾶς εἰς τὴν Γαλιλαίαν から明らかなである。

15) 言語の統計を用いての分析は Dormeyer: Passions, S. 110-117.

16) 二回にわたる呼びかけはルカ特殊資料の言語的特徴 (7:14, 8:24, 10:41, 13:34)。Ernst は31-32をルカ特殊資料, 2 Sam 15:21に言語上類似している33は殉教に直面しているルカの教会の状況を表現, これにマルコ14:30に由来する34と結合させたものとみる。Markus, S. 598 ff.

	マルコ14:26-31(マタイ26:30-35)	ルカ22:31-34
場の設定	オリブ山への途上	過越の食事の会話(22:31-39)の一部
文脈	14:17-25 過越の食事・弟子の裏切りの預言・ パンと杯についての言葉 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin: 10px auto; width: fit-content;">14:26-31</div> 14:32-42 ゲッセマネ物語	22:14-20 パンと杯についての言葉 22:21-23 弟子たちの裏切りの預言 22:24-30 仕える者の在り方 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin: 10px auto; width: fit-content;">22:31-34</div> 22:35-38 財布・袋・剣 22:39 移動 22:40-46 オリブ山での祈り
構成	(a) 弟子たちの逃亡の予告 (b) ガリラヤ行き (c) ペテロの確信 (d) ペテロ否認の予告 (e) ペテロの抗議	(a) サタンの試みとイエスのとりなしの祈り (b) ペテロの立ち直りの予告 (c) ペテロの決意 (d) ペテロ否認の予告 _____

内容的にも結合していないし22:54-62の否認物語とも無関係である。さらに31-32の“兄弟を強める”という特別な委託を受けた後の教会の模範的指導者としてのペテロ像と33-34のペテロ像とは異なる。ただ現行テキストは、33-34、22:54-62否認物語を視野に入れてのルカの改訂編集が施されている。両者の整合性のためにルカに特徴的な伝道術語 32b ἐπιστέφας を用いている (Lk 17:4, Apg 3:19, 9:35, 11:21, 14:15, 15:19, 16:18, 26:18, 20)。さらに 32a のとりなしの祈り ἵνα…ἡ πίστις σου …もルカのモティーフである (イエスの十字架の死23:34a ステパノの祈り Apg 7:60)¹⁷⁾。

17) Büchele: Der Tod Jesu im Lukasevangelium, S. 153. ルカはイエスの生涯と初代教会における重要な出来事を祈りと結合させる。3:21 (洗礼) 6:12 (12弟子の召命) 9:18 (ペテロの信仰告白) 9:28 (変容) 22:39-46 (オリブ山での祈り) など。さらに Apg1:24 (弟子の選び) 6:6 (任職) 13:3 (異邦人伝道の開始)。

② 33-34節

基本的にはマルコ14:30-31の改訂である。マルコ14:27の旧約預言引用, 14:28復活後のイエスのガリラヤ行き, 14:29ペテロの抗議などは削除されている。33節“獄にでも”はルカの挿入であるが (Apg 21:13, 23:29), Ernst はイエスの受難との関係よりも, ルカの教会の殉教の状況が反映されているとみている¹⁸⁾。ペテロの否認は全体的に弱められている (時の知らせの単純化, ἀμὴν の削除など)。下記のように比較するとよくわかる。

Mk τρίς με ἀπαρνήση

Lk ἕως τρίς με ἀπαρνήση εἰδέναι

マルコはイエスを完全に否認しているが, ルカはイエスを知っていることを否認しているわけでも必ずしも全面的に否認しているわけではない。そのことはルカがマルコ14:27, 31b, 50を削除していることとも一致する。イエスを見捨てて逃亡する弟子たちは, ルカの弟子像にふさわしくない。

③ ルカの特徴

(a) 教訓的・勸告的場の設定

ルカがオリブ山途上ではなく過越の食事の食卓の会話に移しかえたのは, Schürmann によれば特別の意味があるという¹⁹⁾。すなわちルカ22:31-34はペテロ像を用いた教団の指導者, 長老たち, 執事たちへの警告として読むべき説教であり, 通常使徒的警告説教の場は原始キリスト教団の共同の食事の場であった。確かにルカの文脈においては, 弟子の裏切りの強調よりも仕える者としての弟子たちの在り方が教訓として述べられている。イエスの受難の切迫性よりも教会の模範的指導者像が語られている。

(b) 弟子たちの否認・逃亡の削除

弟子たちのすべてがイエスに躓くのではない。弟子たちの弱さは一時的なものであって, それもサタンが神の許しのもとに彼らをおろすにかけたからにはほかならない。弟子たちは, イエスの試練の間共にいて最後まで忍耐したことにより神の国の食卓につきイスラエルの12の部族を裁く権威を持つ。彼らはイエスの逮捕の場に居合わせる。弟子たちは遠くからではあるが, イエスの十字架の死に立ち合った。ルカは弟子たちの裏切り, 逃亡には触れない²⁰⁾。

18) Ernst: Lukas, S. 598 f.

19) Schürmann: Abschiedsrede, S. 115, Grundmann: Lukas, S. 406.

20) Linnemann: Studien, S. 72-77.

(c) ペテロ理解の相違

ルカはマルコ以上に12弟子の筆頭、代弁者としてのペテロの位置を強調している (5:10, 8:45, 12:41, 22:7)。しかも基本的には、弟子たちの無理解のモティーフがない。例えばマルコ8:27-33のピリポ・カイザリア途上でのペテロのキリスト告白、最初の受難預言、ペテロの拒否、ペテロに対するイエスの叱責のうち、ルカ9:18-27では後ろの二つの部分が削除されている。ルカはペテロ否認物語を受難物語に組み入れるにあたって模範的なペテロ像を維持している。ペテロはイエスの受難の試練をうけるが、イエスのとりなしの祈りによって“立ち直る”ことができる。とりなしの祈り→悔い改め (ἐπιστρέφω) →イエスのゆるしというルカの構図がここにもある。その結果ペテロには、兄弟たちを力づける (στήρισον τοὺς ἀδελφούς) という重要な職務が委託されている。Schneider はこの時をルカ24:34の復活のイエスがペテロに出現したことに求めている²¹⁾。ペテロの職務は使徒行伝において継承され、ルカの教会において理想的な指導者像となっている。

Ⅲ ヨハネ福音書13章31-38節との関係

共観福音書との平行箇所は、13:31-16:33のイエスの訣別説教の一部を構成している²²⁾。13:37のイエスのためには命を捨てるというペテロの決意、それに対するイエスによるペテロの否認預言である。過越祭の食事の席に場面設定していること、ὥς τρίς の構造などからルカに近い²³⁾。おそらくルカによく似た伝承資料を一部採用しながら (37-38)、ヨハネの文脈のなかで解釈している。ヨハネにとってイエスの受難は、神によって栄光を受ける時、父のもとに行く時が来たことを示すものである。しかし弟子たちは、イエスの行く道がどこであるか理解できずに不安のなかにある (13:36, 14:5, 8)。ヨハネはここでイエスの時とペテロ

21) Schneider: Lukas, Theologie der Heilsgeschichte 1985 S. 148. ルカは原始教団の復活信仰告白定式 I Kor 15:3b-5に最も近い古い証言 (シモンの証言24:34) にたちペテロが“兄弟たちを強める”というイエスの委託をこの時から実現していることを、イエス昇天後のペテロの指導的働きからも明らかにしている。Apg 1:15-26, 特に1:15fの“兄弟たち”という呼びかけは Lk22:32bを想起させる。さらにユダヤ人・異邦人伝道の指導者 (2:14-41, 10:1-11:18)、ペテロのみに語られている“人間を漁る漁師”もペテロの役割を強調している。

22) 13:34 fの「愛の戒め」が二次的挿入である可能性は否定できない。13:31-33と13:36の連結を破っているばかりでなく内容的にも関連がないからである。Schnackenburg: Johannes II, S. 53. テキスト上の問題が全体的にあることは Bultmann 以下すでに指摘されているとうりである。

23) ルカ型は弟子たちの試練の予告→ペテロの決意表明→ペテロ否認予告の順序で、マルコ型の逆である。Klein は場の設定のほかにもルカとの共通点を(a)鶏が一回だけ鳴くこと(b)ペテロの命を投げ出す覚悟(c)κύριεの呼びかけをあげている。それは下記のような資料仮説に基づいている。

の Nachfolge との関係を明らかにしようとしている²⁴⁾。イエスが行くところに、今は誰も従うことはできないということがヨハネ福音書全体において繰り返し強調されている (7:33 f, 8:14, 21, 13:33, 14:2 f, 28, 16:17f, 32)。ペテロはそのことを理解できない。13:37 の *τὴν ψυχὴν μου ὑπὲρ σου θήσω* も決意の表明というよりは、不安からくるペテロの動揺を示すものである²⁵⁾。従ってマルコにおけるようなイエスに対する激しい異議申し立て・対決の姿勢はなく、その結果としての裏切りの苦しみを示す泣き続けるペテロの姿はない。13:38のペテロの否認告知もペテロの無理解からくる受難への Nachfolge の否定というよりも、現時点での Nachfolge が求められていないことを表している²⁶⁾。イエスの時はイエスと父によって行なわれるものでなければならない。ペテロの死に至るまでの Nachfolge は、イエスの復活後において初めて必要とされるのである。

Ⅳ マルコ福音書14章26—31節の積義的・神学的考察

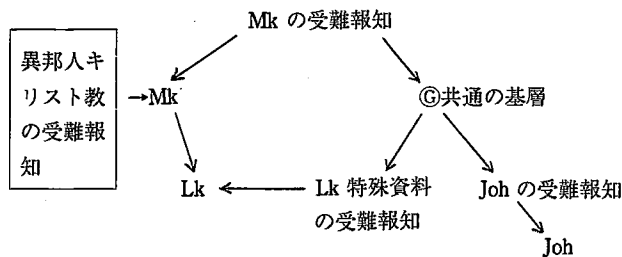
(1) オリブ山途上のモチーフ

マルコ福音書においては、場の移動を用いてしばしば重大な内容が語られる。いくつかの事例をあげてみよう。

(1) ピリポ・カイザリア途上において

(a) ペテロのキリスト告白 (8:27—35)

(b) 最初の受難預言 (13—14 a)



Redaktion und Theologie des Passionsberichtes nach den Synoptikern, S. 381 f. 395.

24) 13:31, 32, 33, 36, 37, 38いずれもイエスの時の知らせである。

Grundmann: Zeugnis und Gestalt des Johannesevangeliums S. 69 f.

25) 注解者たちはこれをペテロの自己過信, 思い上りとみるが, むしろイエスに去られることの不安がイエスに見捨てられまいとする決意として表明されている。“不安”は訣別説教のなかで弟子たちの状況を示すものとしてたびたび言及される (14:1, 27, 16:6, 20, 21)。

26) Schneider: Johannes, S. 256。ペテロが救済史的状況を理解していないという。つまり今はペテロがイエスのために死ぬ時なのではなくて, イエスがペテロさらには世の救いのために自らその命を与える時なのである。

- (c)ペテロの無理解に対する叱責 (32 b-33)
- (d)十字架を負うての Nachfolge
- (2) ガリラヤからカペナウムへの途上において
 - (a)第二回の受難預言 (30-31)
 - (b)弟子たちの無理解と恐れ (32)
 - (c)論争・誰が一番偉いか (33-34)
 - (d)仕える者となることへの勧告 (35)
- (3) エルサレム途上において (10:32-45)
 - (a)第三回の受難預言 (33-34)
 - (b)弟子たちの無理解 (32)
 - (c)ゼベダイの子ヤコブとヨハネの願い (35-37)
 - (d)弟子たちの無理解に対する勧告 (38-45)

イエスの受難・死、弟子たちの無理解、Nachfolge の勧告がいずれも場の転換・途上で語られていることは興味深い。14:26-31においても同様である。マルコはなぜ途上モチーフを用いているのだろうか。途上の場面に共通しているのは、そこが基本的にイエスと弟子たちだけの対話の場だということである。イエスは弟子たちに対して、教育と訓練を行ない、特に十字架への道について繰り返し語り続ける。14:26-31についても同様のモチーフが見られる。(a)イエスの受難預言と弟子たちの逃亡預言 (27) (b) ペテロ・弟子たちの無理解 (29-31) (c) Nachfolge の予告 (28) は三回の受難預言と同じ役割を果たすものである。最後の受難預言ともいうべきものである。

(2) 弟子たちの Nachfolge とガリラヤモチーフ

マルコ福音書において弟子たちは、イエスの同伴者として招かれている。彼らは“人間を漁る漁師”であり、12弟子はイエスのそばにあって宣教に遣され、悪霊を追い出す権威を持っている。12弟子たちには神の国の奥義がすべて説き明かされ (4:10-11, 34), 悔い改めを宣べ伝え、多くの悪霊を追い出し、大勢の病人をいやす力が与えられる (6:12-13)。イエスの傍らにあって特別な任務と権能を持つ弟子像には、イエスに従う者の理想像としての原始教団の12弟子像の継承がある。しかし同時に、弟子たちのイエスに対する Nachfolge の問題には、マルコの鋭い批判が行なわれている。

弟子たちの Nachfolge [A] … おもにガリラヤで

- ・罪人を招くイエスに (2:17)

- ・ 論敵に勝利するイエスに (2:23-28, 7:1-23)
- ・ 病気をいやす力を持つイエスに (3:11-12)
- ・ 神の国の奥義を解きあかすイエスに (4:11, 34)
- ・ 嵐をしずめるイエスに (4:35-41)
- ・ 力と知恵を持つイエスに (6:1-2)
- ・ 5000人の給食と海上を歩くイエスに (6:35-52)
- ・ 山上の変容のイエスに (9:2-8)
- ・ 栄光を受けるイエスに (10:36-38)
- ・ エルサレム入城 (11:7-11)

弟子たちの Nachfolge [B] …ガリラヤからエルサレムへ

- ・ ピリポ・カイザリヤ途上, 第一回受難預言 (8:31-33)
- ・ 第二回受難預言, 誰が一番偉いか (9:31-34)
- ・ 第三回受難預言, 12弟子に (10:32-34)
- ・ ゼベダイの子らの願い (10:35-41)
- ・ ベタニヤにおける塗油に対して (14:3-9)
- ・ 弟子たちの蹟きとペテロの否認告知 (14:26-31)
- ・ ゲッセマネで (14:37-42)
- ・ 弟子全員の逃亡 (14:50)
- ・ ペテロの否認 (14:66-72)
- ・ イエスの十字架の死に際しての不在 (15:33-39)
- ・ イエスの埋葬に際しての不在 (15:42-47)

Nachfolge [A] は、イエスの力あるわざと知恵に対する信徒であるが、しかしそこにおいてもイエスの意図を理解しようとしないう弟子たちをマルコは批判している (例えば6:51, 7:18, 8:17-18, 10:13-14)。

Nachfolge [B] は、イエスの受難と十字架の死の出来事に集中している。弟子たちはエルサレムへの道が栄光への道であることを願っていたのであって、それはたとい“いっさいを捨てて、あなたに従ってまいりました”にせよ変わらない (10:28)。イエスの答えが、“……迫害と共に受け……” (10:30) とあることを悟らない。エルサレムへの道が、受難と十字架の死であることを拒否している。ベタニヤにおいてひとりの女がイエスの体にあら

かじ香油を注いで葬りの用意をしたことを非難する (14:4-5)。ペテロの否認予告に対する抗議も、ゲッセマネでイエスの苦しみをよそに眠りこけている姿も、全員逃亡したのも、ペテロが三回イエスを否認したのも、イエスの十字架の死・埋葬にも立ち合わずに完全に見捨てたのもそのためである。

マルコは Nachfolge [A] と Nachfolge [B] とを対照させ、弟子たちの Nachfolge の真髄が [A] であって [B] でないことを鋭く批判している。それは弟子の無理解のモチーフをこえている。14:26-31のペテロ否認予告もそのような文脈におかれている。弟子たちはイエスを見捨てて逃げてしまったが、イエスは決して弟子たちを見捨てはしない。マルコはそのことを 14:28, 16:7で繰り返し強調している。14:28にマルコはなぜガリラヤモチーフを挿入したのだろうか²⁷⁾。

14:28…… προάξω υμᾶς εἰς τὴν Γαλιλαίαν

16:7…… προάγει υμᾶς εἰς τὴν Γαλιλαίαν

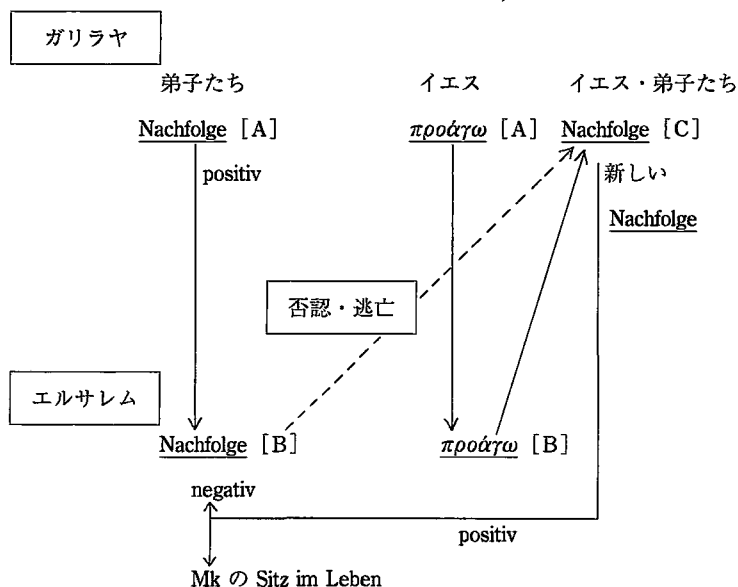
10:32…… προάγων αὐτοὺς …

マルコ福音書ではイエスの行為としての προάγω はこの三箇所にのみ用いられ、イエスの強い意志的主体的行為をあらわしている。受難と十字架の死と復活は、受難預言においてすでに神の δεῖ として予告されていたものである。弟子たちは、Nachfolge [B] に失敗、挫折、逃亡したが、イエスはその弟子たちに先立ってガリラヤに行きそこで彼らを再び新しく Nachfolge へと招くのである。14:26-31においてすでにそのことは予告されているのであるが、ペテロをはじめ弟子たちにはまったく顧みられていない。16:7のイエスの復活であらためて確認されるが、マルコはそのことを通して弟子たちのイエスに対する新しい Nachfolge の可能性を予告している。それは“自分を捨て、自分の十字架を負うてイエスに従う”ことが可能となり (8:34)、イエスすなわち福音のために自分の命を失う” (8:35) Nachfolge [C] へと招かれることである。それはまた後の教会の歴史、マルコの“Sitz im Leben”とも結合しているのである。

なぜガリラヤなのか。ガリラヤはマルコにとって単なる地理的表象ではない²⁸⁾。ガリラヤは、飼う者のいない羊のような大勢の群衆に、病人や悪霊につかれた者たち、罪人・取税人たちに福音を宣教し、いやしのわざを行なった神の国運動の神学的表象である。イエスにとって

27) マルコ福音書における地理的表象の研究として Schenke: Das Markusevangelium, 1988 S. 62-68.

28) マルコ福音書におけるガリラヤモチーフについては、すでに Lohmeyer, Marxen の研究がある。すなわちガリラヤはその終末共同体にとって復活のわざが成就する約束の地であり、パルージャ待望の地である。



— イエスすなわち福音のために十字架を負うて従うこと —

ガリラヤの道はエルサレムへの道でもあり、エルサレムへの道を経て初めて真に神の子としてガリラヤにおける神の国運動を成就するのである。その意味においてガリラヤとエルサレムは対立的ではなく *aufheben* されてガリラヤへと続く道である。しかしペテロは、復活のイエスに出会うまではそのことを理解することができなかった。ペテロの召命 (1:16-20) において“人間を漁る漁師にしてあげよう”と招かれ、すぐに網を捨ててイエスに従ったが、それが本当に実現するためには Nachfolge [C] を経て、かつて失敗した Nachfolge [B] に到達しなければならない。しかもそれは自己の力を信頼することではなくて (14:29, 31) ただイエスによってのみ可能なのである。

結

14:26-31のペテロの否認の告知は、14:66-72のペテロの否認物語の二次的伝承に拡大され、受難物語の文脈において重要な位置を占めている。その中心テーマは、イエスの受難と十字架の死に対する弟子たち、特にその象徴であるペテロの Nachfolge の問題である。

- (1) 弟子たち (12弟子, ペテロ) は、マルコにとってイエス運動の同伴者、信従者であってイエスはあらゆることを弟子たちに説き明かし、訓練している。→ガリラヤにおける Nach-

folge [A]

- (2)しかし、イエスのガリラヤからエルサレムへの道、すなわち受難と死の告知を理解することができない。驚きと恐れのために拒否し、エルサレムへの道を栄光への道として解釈しようとする。→ Nachfolge [B]
- (3)ペテロは、イエスによる否認の告知を否定するが、それは自己信頼からだけではなく、現実のものとしてイエスの受難と死とをまだ受けとめていないためである。
- (4)イエスは、弟子たちの否認、逃亡をあらかじめ先取りしている。すなわち、イエスの十字架報知 (15:33-39) において、イエスは神によって捨てられるが、すでに指摘しているようにἐγκατέλιπές (完了形の強調法) は、イエスの十字架の死において初めて捨てられるのではなくて、ユダヤ人指導者層に (3:6, 8:31, 9:31, 10:33-34), 群衆に (15:8, 13-15), 弟子たちに捨てられているのである (8:33, 14:27, 31, 50, 66)。
- (5)マルコは、弟子たちのNachfolge [B] の拒否を批判しながら、同時に14:28イエスのガリラヤへπροάγωするという予告 (16:7) を文脈に組み込むことで弟子たちのガリラヤにおける新しい Nachfolge [C] を先取りさせている。ここにマルコ福音書全体を貫いている弟子像の完成を見ることができる。鋭い弟子批判と同時に—それは女たちの Nachfolge-Motiv と対照的である—弟子を Nachfolge へと招き、イエスすなわち福音ために十字架を負うて従う弟子たちに、マルコの教会の“生活の座” Sitz im Leben をみているのである。